

原 著

## 看護・医療福祉系の学生に対する クオリティ・オブ・ライフの教育

近 藤 功 行

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成8年11月20日受理)

Quality of life and Medical Welfare Education

Noriyuki KONDO

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Nov. 20, 1996)*

**Key words :** quality of life, medical welfare education, living quality, mortal quality

### Abstract

A survey of various literature indicates that two factors are very important in determining the quality of life (QOL). The two factors are "living quality", QOL without consciousness of death and "mortal quality", QOL with consciousness of death. Student's senses of their QOL were studied in terms of the two factors before and after their self-study. Initially, most of student's senses were only the living quality but they changed it into both living and mortal quality after their self-study. We considered the education of QOL from the present results.

### 要 約

種々な分野の文献を調査した結果、クオリティ・オブ・ライフ (QOL) の意味を判明する上での重要な2つの言葉を見いだした。それらは、「生活の質」と「生命の質」である。この言葉に注目し、学生の自主学習前後のQOLに対する訳出を調べた。最初、多くの学生は「生活の質」のみと回答していたのに対して、自主学習後に「生活の質」と「生命の質」の両方の意味があることを知った。教育により学生の理解や考えが変化して成長していく中で、わ

れわれ教育する側の立場の者は、どのように関わって行けばよいのであろうか。特に、いのちの場を基調としターミナルケア教育の充実が叫ばれる看護教育、また生活の場を基調とする医療福祉系の学生教育における視座を、得られた結果をもとに、QOLの教育について考究する。

### はじめに

近年、耳に入れる機会が多くなった言葉の1つに、クオリティ・オブ・ライフ (QOL) という用語がある<sup>1)</sup>。QOLという用語は、医学・保健学・文学など様々なジャンルにわたって用いられており、書籍に現れているだけでなく、映画などにも描かれている。人々の日常生活を包括して、また終末期医療などに人生の意義を踏まえて登場してくる。インフォームド・コンセントなどの医学、医療福祉系領域で用いられる用語と同様に、QOLという用語は定訳しにくい用語である。書籍・文献をみる限りでは、「生活の質」「生命の質」といった訳出が多いが、「生きることの質」といった訳出もその意味するところは大きい<sup>2)</sup>。

医学教育もそうであるが、コ・メディカル教育である看護教育、また医療福祉の分野で教育を行う者にとって、QOLという言葉の持つ意味をどのように受けとめる必要があるだろうか<sup>3)</sup>。QOLの概念を追求していくと、この用語が如何に幅の広い用語であるかがわかる<sup>1)4)-6)</sup>。看護教育・介護福祉教育・社会福祉教育の中で、QOLの持つ意味を広義に教育できる素養は、われわれ学生教育に携わる者にとって必要不可欠である。QOLという用語の持つ意味を明らかにしていく過程で、社会福祉教育・介護福祉教育の充実をはかることを本研究の目的としたい<sup>7)</sup>。

### 調査の方法

QOLに関する学生教育を行う時、その意味を確立し、教育効果を検討する前に、教育を受ける対象者の下地について理解を深めることが必要である。この下地には、対象者を取り巻く環境と学生自身の知識および理解力がある。対象者を取り巻く環境の一つとしては、様々な書籍の文中に記載されているQOLの訳出を調査した。その調査結果を分析して、QOLに対する学

生の理解をとらえる上で、標識となりうるものを見だし、この標識を利用してQOLに対する学生の解釈を判別した。本調査は1995年6月期に行った。調査手法は、アンケート調査を利用して、学生の知識および理解力を調べた。学生の知識の初期値を得る目的で、QOLに関する特別な教育を行わない医療福祉系の学生に対して、QOLの意味をたずねた。その後、学生の理解力を調べる目的で、QOLの意味を再びたずねた。これにより、QOLの意味の自主学習による変化を分析し、自主的な学習による教育効果を考察し、教育方針を検討した。

### 書籍の記述

図書館など学生が普段利用している場所で、閲覧できる文献を通して、その文献に記述されているQOLの訳出について調べた。今回は、対象となる文献を、一般の書籍に限り、学術雑誌などは除外した。調査を行った書籍の数は、93冊である。様々な分野の文献にQOLの表記が存在した。それぞれの分野に関する分類は行わずに、書籍に記述されたQOLの訳出を表1に示す。ここで、「総合的見地からの記述」と記されているものは、いろいろな言葉によってQOLを説明しており、特定の定まった言葉によって表現をしていないものである。

書籍の記述をながめてみると、「生活」および「生命」という言葉が目につく。これらの言葉がQOLを把握する上で重要な指標となりうることを確認できた。QOLのクオリティとは、ある基準またはある観点から判断される内容の評価であって、QOLを測るベクトルに「生活」および「生命」をあてはめることができる。従って、QOLに対する理解を判別する指標として、「生活の質」および「生命の質」を採用することが可能である。

QOLを理解する仕方は多様であり<sup>1)4)-6)</sup>、同様に、「生活の質」と「生命の質」を区別する方法

表1 書籍にみられる QOL の訳出

書籍の記述	冊数	分類	割合
生活の質	36	生活の質	44%
生の質	3		
生き方の質, 生活の質	1		
生活の質, 生命の質, 人生の質	10	生活の質 生命の質	17%
生活の質, 生命の質	4		
生活の質, 人生の質	1		
生の質, 人生の質	1		
生命の質	12	生命の質	17%
人生の質	4		
総合的な見地からの訳出	5	その他	5%
QOL そのまま	16	そのまま	17%

も多様である。筆者は、QOL の解釈を「いのち」に対する意識があるかないかに対応させて、それぞれ、「生活の質」および「生命の質」として区別することにしている。ある瞬間に生きていて、その質を多角的に追求することを「生活の質」としよう。このことは、永遠の未来に向かって、一瞬一瞬を有意義に生きていくことである。現在をスタート地点として、未来の可能性を感じとり人が生きていく時間の質である。一方、いのちには限りがあり、その期限である死を意識して、生きている質を多角的に追求することを「生命の質」という。死に向って、充実した過去を積み重ねていくことである。人の死をゴール地点として、ゴールを意識しつつ、人の一生を充実させていく時間の質である。言い替えると、「生活の質」は如何に生きていくかということであり、「生命の質」は如何に死んでいくかということである。

書籍の記述を「生活の質」および「生命の質」という観点で分類した結果を表1の右側に記載した。「そのまま」と分類されるものは、全体の約2割にあたり、「その他」が全体の5パーセントにあたる。それ以外の残りの過半数が、「生活の質のみ」であり、さらにその残りを「生活の質, 生命の質」および「生命の質のみ」で等分している。このように書籍の多くが、「生活の質」を記述していることがわかる。市販されている

書籍を頼りに、QOL について訳出を求める人にとって、その訳出を「生活の質」として記憶してしまう機会が多いことがここから推測される。

#### 学生の知識

アンケートに協力してくるた医療福祉系の学生の数は、408人であった。学生の3人に2人はQOLという言葉を知っていることがわかった。QOLという用語はテレビCMにも使用されているなどから、学生の間にもかなり注目されているのではと思われる。

同時に行ったアンケートで、QOLという言葉を知っている学生にはその訳出した言葉を答えてもらい、知らない学生にはイメージする言葉を答えてもらった。この結果、得られた多くの学生の回答は、「生活の質」および「生命の質」そのものであった。それ以外の回答を、「生活の質」および「生命の質」という観点で分類し、表2にまとめた。また、「生活の質」および「生命の質」に分類できないものを「その他」に分類した。ほとんどの学生の訳出は、「生活の質」および「生命の質」の訳出の域を出ることはなかったが、一部の学生はそれ以外の回答を出していた。表2から明らかのように、書籍に現れている訳出よりも学生が回答した訳出の方がバラエティに富んでいることがわかる。書籍は、QOLのもつ独特な意味を強調して取り上げる必

要がなければ、特別な解釈をせずに、規格化された無難な言葉を使用することになる。これとは逆に、正解を要求されない学生の解釈には、広がりが見れてくることがわかる。

表2の分類に従って、学生の人数を振り分けた結果を表3に示した。「生活の質」、「両方」および「生命の質」の表記は、それぞれ、「生活の質のみ」、「生活の質」および「生命の質」の両方、「生命の質のみ」に当てはまる回答を示したものの数である。「その他」の表記は、回答を書いている者が多くを占めており、残りは「生活の質」および「生命の質」に結びつかない回答を書いたものの数であった。「その他」の割合は、全体の8パーセントであり、多くはない、QOLを「生活の質」と記憶している者が半数を占めており、この結果は、表1に示した書籍を用いた調査結果とほぼ等しい結果を得た。このことは、書籍の調査からQOLを「生命の質」というよりは、「生活の質」として認識する環境にあり、学生もそのように認識していることがうかがえる。書籍の調査から得た結果と異なっている点は、学生の回答には「生命の質」のみを回答した者の割合が多いことがあげられる。この理由として、医療福祉系の学生であることから、限りある「いのち」に対する意識が働いている人の割合が多くなっていることも推測できよう。

## 自主学習の効果

医療福祉教育を受けている学生を対象として、文献調査や討論などの自主学習によるQOLの知識獲得について調査を行った。自主学習前後のアンケート結果を比較することによって、自主学習による効果を知ることができるからである。自主学習によるQOLの認識に対する変化の様子を、各項目間の関係として表4①・②に示す。行によって分けられた項目は、自主学習前の学生の回答に対応している。したがって、表4②の右端に示された各項目は自主学習後の学生の回答に対応している。すなわち、表4の下から2行目に示された各項目間の合計の値は、自主学習後に「生活の質」、「両方」、「生命の質」および「その他」と回答した学生の人数にあたる。

表4②の最下行をみると、「両方」が全体の6割を占め、「生活の質」が3割、「生命の質」は1割を下回っていることがわかる。表3と比較すると、「生活の質」および「生命の質」ともに大幅に減少し、「両方」が約5倍に増加していることがわかる。このことは、自主学習を経た結果、QOLには「生活の質」と「生命の質」の2つのとらえ方があることを学生が学習し始めていることを現しているものと言える。また、「その他」の割合が3分の1に減少していることか

表2 医療福祉系学生によるQOLの訳出

生活の質	生き方、快適な生活、充実した生活、満足した生活、心地よい生活、有意義な生活、アメニティ、暮らし
生命の質	死に方、生涯の質、命の質、人生の質、豊かな人生、一生の質、死の尊重、ターミナルケア、自宅死亡
その他	生活様式、町づくり、安全、保障、生活水準、個性化、生活設計、生命の創造、長生き、生活実感、社会福祉

表3 医療福祉系学生によるQOLの訳出分類

	生活の質	両方	生命の質	その他	合計
人数	194	53	125	36	408
割合	47%	13%	31%	9%	100%

ら、単純に QOL の意味が学生に浸透していることがわかる。

自主学習前後の変化を表 4 ②から詳細に検討してみると、2つの現象が観察される。1つは、先に述べたように自主学習によって、「両方」と回答する人数が増加する現象であり、大きな人数の変化となっている。「生活の質」から「両方」へは、約3分の2が移動している。また、もう1つは、「生活の質」と回答する人数が増加する現象である。「両方」と回答する学生の数は、「生活の質」へ約4分1が移動し、「生命の質」からは約3分の1が移動、「その他」からは約3分の1が移動していることがわかる。このことは、自主学習に使用された教材に QOL を「生活の質」と紹介していることが多いのではないかと考えさせられる。

### 理解の定着

概念的なことを説明するのには、言葉を記憶しているだけでなく、それが持つ内容をイメージして、他と区別することができなくてはならない。このため、概念に対する理解度を知るには、回答者本人に具体的に説明させることがよい方法と思える。したがって、QOL に対する体験

を自主学習後に行ったアンケートと同時に回答してもらった。ただ、このことは言葉の訳出イコール記憶、また、体験イコール理解、とするものでは決してない。そもそも、QOL は生きていることそのものを評価することにあたるから、誰でも身近に体験していると思える。すなわち、体験を語る事が出来るということは、QOL について何らかのイメージを持っていることを現していると言えるのではないか。一方、QOL の言葉を訳出することは、少なくともその言葉を一時的にしる、記憶していることにあたる。このような観点から、自主学習後の QOL に関する体験のアンケート結果を分類して、自主学習後の QOL に対する訳出と分類した QOL に関する体験のアンケート結果を組み合わせ表 5 に示した。

行によって分けられた項目は、QOL の記憶した意味、自主学習後の QOL の訳出を分類した結果に対応する。したがって、表 5 の右端に示された各項目の合計の値は表 4 ②の下から2行目と同じ結果を示している。一方、列によって分けられた項目は、QOL の理解した意味、QOL に関する体験を分類した結果に対応する。すなわち、表 5 の下から2行目に示された各項目間

表 4 ① 自主学習前後の QOL の訳出

	生活の質	両方	生命の質	その他	合計
学習前	194 47.6	53 13.0	125 30.6	36 8.8	408人 100%
学習後	118 28.9	250 61.2	30 7.4	10 2.5	408人 100%

表 4 ② 自主学習前後の QOL の訳出の変化

学習後 学習前	生活の質	両方	生命の質	その他	合計
生活の質	56	125	8	5	194
両方	12	40	1	0	53
生命の質	38	65	19	3	125
その他	12	20	2	2	36
合計	118	250	30	10	408
割合	29%	62%	7%	2%	100%

の合計の値は、「生活の質」、「両方」、「生命の質」および「その他」と QOL に関する体験を分類された学生の人数にあたる。

表5の最下行をみると、「その他」が約半分の割合を示しており、半数の学生が QOL に関する体験について回答できないことを現している。QOL は身近なことであって、その意味を理解していなければ、アンケート回答者が20年程度の人生しか過ごしていないとはいえ、何らかの体験を語ることはできるはずである。本人の言葉で本人の考えを述べられることが知識に対する理解と定着を現していることから、アンケート回答者の半数が QOL について、文字または言葉として情報を持っているだけで、理解していないことがわかる。「両方」が2パーセント以下と少ないのは、「生活の質」または「生命の質」どちらかについて、QOL に関する体験を述べればよいからである。「生命の質」より「生活の質」の割合が多い理由は、回答者の年齢が若く、死や人生を意識することがまだ少ないことからであろう。逆に年齢の高い人々に対して本アンケートを行ったとしたら、限りある人生をどのように生きていくかということが表現される可能性が高いかもしれない。

QOL の理解に関する自主学習の効果を、表5をさらに詳しく検討することによって知ることが可能である。本来、記憶した言葉とそれに対する理解が一致することが好ましい。それには、表5の対角線上の人数が多くなること、すなわち、知識と理解においてそれぞれ同じ項目の人数が多くなることが期待される。しかしながら、本調査の結果をみる限り、その傾向はあまり現

れておらず、代わりに3つの現象が現われている。

1つは「両方」の言葉を訳出した学生が、「生活の質」または「生命の質」に分類されるどちらか一方の体験を回答していることである。これには、QOL の2面性を反映しており、「生活の質」または「生命の質」のどちらか一方について回答すればよいからとも思えるが、「両方」が「生活の質」と「生命の質」に流れていくのは、むしろ、体験によるものの方が大きいのではなかろうか。頭の中で考えただけだと「両方」が考えられるが、体験した場合はどちらか強烈な印象を受けた方に偏りがみられるのではなかろうか。この点が指摘されよう。

また、1つは、「その他」への流れである。これは、QOL を訳出した言葉を記憶しただけで、回答者本人の中でその言葉が消化・吸収されていないことの現れである。最後の1つは、数としては少ないが、「生活の質」が「生命の質」になり、「生命の質」が「生活の質」に変わることである。この原因として、QOL を正しく理解できていないことと、QOL を明確に「生活の質」と「生命の質」とに分離することが困難な場合があることが考えられる。

QOL について自主学習をしてもらい、理解の進み具合を調査した。その結果から、QOL には種々のとらえ方があり、QOL の表面的な意味を述べることは容易であろうということが推測される。そもそも、この言葉がどういういきさつで用いられるようになったのかなど、その本質的な意味を理解してもらうための教育そのものの必要性があることが感じられた。QOL につい

表5 自主学習前後の QOL の記憶と理解

理 解 記 憶	生活の質	両方	生命の質	その他	合計
生活の質	45	0	18	55	118
両 方	83	7	36	124	250
生命の質	2	0	16	12	30
そ の 他	2	0	1	7	10
合 計	132	7	71	198	408
割 合	32%	2%	17%	49%	100%

て、自主学習をする上でのふさわしい教材が身近に存在すればよいのではと筆者は考える。したがって、QOLの適切な教育の必要性を強く感じると共に、その方法を探る必要性があらうかと思う。

### QOL 教育への指針

QOLに関する体験のアンケートの回答は、アンケートを回答した学生が理解できているQOLを記した結果である。したがって、種々な観点から分析することにより、QOLが学生にどのように理解されているか知ることができる。また、QOLをどのようにとらえていくことが容易であるかを知ることができる。すなわち、アンケート結果の分析からQOLに関する適切な教育の指針を探ることができるであろう。

「生活の質」または「生命の質」の内容を含むQOLに関する体験を回答することができた学生数は、210人であった。得られた結果を検討していくと、2つの観点から議論できることに気づいた。1つは、QOLに関する体験を本人の行為に基づいて述べているのか、観察した出来事について述べているのかである。ここでは、前者を「本人」と区分し、後者を「他人」とすることで述べてみたい。また1つは、心が純粋に満たされているような体験について述べたものか、物質的な欲求を満たそうとする体験について述べたものかである。前者を「精神」と区分し、後者を「物質」と区分することにする。なお、身体的な不自由さの解決や他人から受ける援助への欲求なども「物質」に含めた。

「本人」に関する回答をした学生は92人であり、「他人」に関する回答をした学生は118人であった。明らかに「本人」より、「他人」の方が多い結果となった。このことは、QOLを本人の

直接的な経験から探すよりも、他人の中で見つけ出すことの方が困難ではないことを現している。また、自分自身についてQOLをとらえることができていないことから、QOLに対する日常生活における意識の低さがわかる。

QOLは、そもそも自分自身のためにも、まず、追求すべき問題である。特に学生に求めたいことは、QOLに対する意識を強くして、主体性をもって、生きていくということである。筆者が今回取り上げているQOL教育という側面には、このような教育により学生の理解や考えが変化し成長していく過程をどうとらえて行くかといったところに主眼を置かねばならないと思う。

「精神」に関する回答をした学生は81人であり、「物質」に関する回答をした学生は129人であった。明らかに「精神」より「物質」の方が多い。これは、QOLを心の豊かさに求めるのではなく、物質的に満たされることとしてとらえることの方が容易だからと思われる。物質的な豊かさを確保することによって、精神的な安らぎを得られることは事実である。しかし、人の物質的な欲求は、輪廻のごとく永遠に続くものであることから、それがQOLを追求する原動力になっても、決してQOLに到達する手段にはなり得ないのではなかろうか。また、本来、QOLは物質的な欲求によって満たされるのではなく、心の意識の問題である。心にゆとりを持って、精神的な豊かさを感じ、自己を向上させていく意識が重要であろう。

アンケート結果に現れている、「本人」、「他人」、「精神」および「物質」の組み合わせと「生活の質」および「生命の質」との関係を表6に示す。「本人・精神」とあるのは、「本人」に関する回答をして、かつ「精神」に関する回答をした学生のカテゴリを現している。「本人・物質」、「他

表6 「本人」および「精神」と「生活の質」および「生命の質」

	本人・精神	本人・物質	他人・精神	他人・物質	合計
生活の質	38	43	17	34	132
両方	1	3	2	1	7
生命の質	2	5	21	43	71
合計	41	51	40	78	210

人・精神」および「他人・物質」もそれぞれ同様に分類された組み合わせを現している。

「他人・精神」および「他人・物質」の項目を眺めると、「生命の質」および「生活の質」との間に似通った傾向がみられる。「生活の質」が「生命の質」の8割程度と数値そのものがほぼ等しいだけでなく、「精神」より「物質」に分類される学生の数のほうが1対2の割合で多いことがわかる。これに対し、「本人・精神」および「本人・物質」に分類される項目においては、「生活の質」に分類される回答は十分な数があるのに対して、「生命の質」に分類される回答はほとんどないことがわかる。ここで、断りを入れておかねばならないことは、筆者は、「本人」および「他人」、「精神」および「物質」、「生活の質」および「生命の質」と二者択一的に分類してどちらが優っているかを議論しているのではない。

アンケートに回答した20歳前後の学生にとっては、他人の死について考えることはあっても、自分自身の死を意識することは少ないと推測できる。このように、アンケートに回答してくれた学生自身の死を意識した QOL に関する体験など、そういった内容がどれだけ反映されているかなども、筆者は関心を持ってみたかった。QOL 研究は、ターミナルケア教育にも、直接間接的に関わることでありと思われる<sup>7)</sup>。

以上の結果をまとめ、QOL の教育について指針を述べることにする。死までに至る道のりの長い学生が、死を意識して QOL を学ぶことには困雄がある。しかし、QOL のもつ意味が死の教育につながっていくことは教示出来よう。したがって、講義を聴く学生に対しては、「生活の質」「生命の質」に関する身近な話題を提供し、QOL について理解を深めさせることが必要である。その時、他人の QOL に関する話よりより効果的と思われることは、学生自身に直接関わることを話題にすることである。書籍に限らず、映画の部分での紹介も可能である<sup>3)</sup>。物質的、身体的な満足を得ることを QOL の導入として、

精神的な安らぎを得ることを述べて行き、心の意識として QOL を追求することを考えることも必要であろう。特に、QOL を意識することを身につけさせることは重要と思える。

学問的にみれば、QOL はそもそもアメリカにおける『社会学』の分野で、国民の生活の質(国民の暮らしの豊かさ)に焦点をあてた概念として生まれたものである<sup>1)8)9)</sup>。もともとの最初が、「生活の質」ということで始まった言葉であるということ、それが医療で注目されるようになったのは、延命中心の医療に対しての批判として、QOL は生命の量ではなく「生命の質」であるということに論じられるようになった訳である。それが、現在は「生活の質」つまりは満足度ということ、あるいは「生活の質および生命の質」の「両方」で、落ち着いたように思える。“Quality of Life”の“Life”という英語のもつ意味が生活、生命、人生、生存、救済など幅広い意味を統一的に内包しているのであり、そこに意味がある<sup>10)</sup>。それゆえ、混在してしまっているとも言える。「そもそも、用いられる人によって解釈の違うこの QOL という言葉を日本では用いること自体が難しい」とみる研究者もいる。「生活の質」および「生命の質」と分けて英訳を試みること自体に疑問を感じる研究者もいる。ただ、QOL の定義として言葉でないので、それぞれの分野で自分がどう考えるかということが大事であるということではなかろうか。つまりは、この言葉を2つに分け、それを英訳することも、それぞれの研究者の研究の分野とその目的によるものと言えよう。

本稿を作成するにあたっては、寺澤昇久博士(京都工芸繊維大学工芸学部物質工学科)に QOL アンケートの整理、データの分析などの協力を得てきました。また、終始、論考を進めていく上で議論また討論する機会を持ってきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。



## 文 献

- 1) 黒田裕子 (1992) クオリティ・オブ・ライフ (QOL) その概念的な側面. 看護研究, **25**(2), 98.
- 2) 石谷邦彦 (1988) 特集にあたって. *Pharma Medica*, **6**(7), 11.
- 3) 近藤功行, 未光 茂 (1995) QOL という用語について — 医学・看護・福祉教育の中での視点から —. 介護福祉教育, **1**(1), 30.
- 4) 藤山正二郎 (1990) ライフスタイルと Quality of Life. 日本保健医療行動科学会報, **5**, 202.
- 5) 黒田裕子 (1990) 欧米における Quality of Life に関する文献の概要と課題. 日本保健医療行動科学会報, **5**, 202.
- 6) 近藤功行, 吉川武彦, 未光 茂, 寺澤昇久 (1996) 社会福祉・介護福祉教育におけるクオリティ・オブ・ライフの視点 — 教材研究並びに学生教育への提言 —. 平成7年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究研究成果報告書.
- 7) 近藤功行 (1996) 介護福祉職とターミナルケアの視点 — ある末期患者の死をとおして —. 保健の科学, **38**(1), 50—56.
- 8) Oppong JR, RG Ironside and LW Kennedy (1988) Perceived Quality of Life in A Centre Periphery Framework. *Social Indicators Research*, **20**(6), 605—620.
- 9) 筒井真優美 (1996) 看護学における QOL の概念と測定 — 2つの看護婦の論文を通して —. 看護研究, **25**(2), 57—60.
- 10) Kleinpell RM (1991) Concept Analysis of Quality of Life. *Dimension of Critical Care Nursing*, **10**(4), 223—229.